

## 奇想天外ノススメ

杉谷 隆

大学院で水路実験をしていたとき、定時観測をしては砂を乾かす単調な日が続いた。その徒然に論文でも読めば偉いが、私は文庫本のSFを読んでいた。その量は2年間で60kgになった。

思い出せば、小学校の図書室ではハインラインなどの古典を漁り、中学時代には『STAR TREK』（オリジナルのTVシリーズ）が放映され、たちまちトレッキーになった。NHKで筒井康隆『時をかける少女』の連続ドラマをやったこともあった。あの主役の娘は何という名だったっけ？

どんな分野でも、3年間300例の知見を積み上げ、ある鑑識眼が養われると私は信じている。そこで、参考書紹介の番外編をやってみよう。

空前絶後の傑作は、ホーガン『星を継ぐもの』だ。月で5万年前のヒトの死体が発見されたのを発端に、遺物の分析結果から漸新世以降のヒト進化の真相を推理し、おおらかな人間讃歌を提示する。地学・生物学にもとづく正統派科学小説であり、虚構であることを忘れるほどだ。最近では超新星ネタもみられるが、フォワード『竜の卵』でもプロイス『天国への門』でも、なお料理法が観念的で未熟すぎる。

時間・歴史物の圧巻は、豊田有恒『モンゴルの残光』だ。元朝倒壊を狙う未来人がたどる運命を、歴史の大河の中に描ききる。彼の研究熱心さは、日本古代史物や『ダイノサウルス作戦』にも発揮されている。無名時代には『鉄腕アトム』の脚本も書いていたが、これが私らの世代に与えた影響はきわめて大きい。

時間物の短篇では、小松左京『時の顔』が秀逸だ。江戸風俗、呪い、父性愛などの素材を巧みに織り込み、どんでん返して因果の環を閉じる手並みが鮮やかだ。光瀬龍は歴史小説も得意とするので、『ペニシリン1611大江戸プラス』などは安心して楽しめる。

異境の悪夢のような生態系と、それに同化していく人間の実存を描いた傑作は、筒井康隆の短篇『メタモルフォセス群島』と『ボルノ惑星のサルモネラ人間』だ。彼に拮抗しうるのはディックあたりだが、仕掛けの明快さを欠く。筒井康隆の天才は、抱腹絶倒の『関節話法』、メルヘン『わが良きウルフ』、テレパス『七瀬』三部作のほか、全方位に爆発している。

光瀬龍『百億の昼と千億の夜』は、構成は粗いが、サイボーグと化した釈迦、イエス、プラトン、阿修羅が創造主をめぐるって戦うという破天荒の着想と、広大な時空間をみたく虚無感が酔わせる。このニヒリズムは他の宇宙物にも投影され、独自の境地を築いた。マキャフリー『歌った船』は、宇宙船の制御機に組込まれた娘の脳の人間の成長を描く、繊細な秀作だ。

冒険物では、まず田中光二『わが赴くは蒼き大地』と『エデンの戦士』をあげる。特命を帯びた主人公と従者が難道中を遂行するという、古風な西遊記形式をとりつつも、豊かな空想世界と快い緊張感をつくっている。ニーヴン『インテグラルツリー』は、ガス雲に浮かぶ巨木という舞台装置が楽しい。山田正紀『崑崙遊撃隊』や五代格『クロノスの骨』は、純粋に冒険小説として高く評価できる。

怪奇物では、半村良『石の血脈』が、吸血鬼伝説に斬新な解釈を示した力作だ。小松左京の短篇『くだんのはは』（九段の母ではない）は真に怖いので、妊婦は絶対に読んではいけない。

さて、紙面もなくなったのでまとめよう。最後に注意を喚起したいのは、第一に、ここに示した評価は、SFだけでなく私の基本的な価値観とオーバーラップしていることだ。第二は、秀作は各作家の初期のものに多いということだ。その観点から読んでみることを勧める。